

ラングとララング

—ソシュールとラカンにおける言語概念と記号の恣意性⁽¹⁾—

末 永 朱 胤

はじめに

精神分析の分野で構造主義を代表すると言われ、ソシュール Saussure に端を発する諸概念を援用するラカン Lacan だが、両者の理論を正面から突き合わせる検討作業はそれほど多くはなされてこなかった⁽²⁾。ソシュールの概念とラカンの理論はどう出会い、あるいはどうすれ違うのか。

私たちはこの問いに、ソシュールのあるテキストの読解を通じて取り組んで行く。そのテキストとは、Manuscrit français 3961 の分類番号の下、ジュネーヴ公共・大学図書館に保管されている手稿である。内容は一般言語学に関するメモで、『カイエ・フェルディナン・ド・ソシュール』誌 [=CFS] 43号に公開された時は「ディスクールに関するノート」と題された。ヴェーダ詩韻律研究に充てられた帳面の余白に残されているので、書かれたのは、1906年頃開始されたと思われるアナグラム研究の時期かその直前と推定される。1907年の第一回一般言語学講義とも重なるかもしれない。

これまでにこのテキストを公開した文献を私たちのわかる範囲でリストアップすると次のようになる。

Starobinski, 1971, p. 14

丸山圭三郎, 1981, pp. 168-169

Saussure, 1990, CFS 43, pp. 93-94 (Amacker による公開)

前田英樹, 1994, p. 23

岡村民夫, 1997, p. 19

(巻末文献表を参照のこと)

私たち自身ほかの所でこのテキストの一部を引用したが⁽³⁾、このリストは部分引用ではなく全文を公刊したものに限った。私たちの意図は、実際に手稿を閲覧した上で活字化したものが複数あることを示すことだからだ。最初に公刊されたのはスタロバンスキー Starobinski の『語の下の語』によってである。『カイエ・フェルディナン・ド・ソシュール』では、スタロバンスキー版よりも厳密な校訂記号を附して活字化されている。またフェールの論文 (Fehr, 1995, pp. 431-438) はこのテキストの全文を再現しているが、全面的に『カイエ』に基づいた引用なのでリストから除外した。日本人三者による公刊はもちろん日本語に訳してのものだが、手稿のオリジナル、少なくともそのマイクロフィルムかコピーは参照したものとされる。

以上を確認した上で問題のテキストを読もう。ここでは、もっとも厳密な校訂を施した『カイエ』のヴァージョンを訳出する。

^{ラング}言語が存在するのは専らディスクールを目的としてなのだが、^{ラング}言語からディスクールを引き離すのは何だろうか。あるいは、ある瞬間に、^ラ言語がディスクールとしての活動に入ると言うことが可能になるのは何によってだろうか。

色々な概念がそこにある、^{ラング}言語の中に待機して (つまり言語形態を纏って)。例えば、牛, 湖, 空, [[強い]], 赤い, 悲しい, 五, 割る, 見る, というように。どの瞬間に、あるいは、どのような操作によって、それらの間に成り立つどのような作用によって、どのような条件によって、これらの概念はディスクールを形作るのだろうか。

これらの語がなしているこの一連続は、それが喚起する観念がどれほ

ど豊かでも、ある個人に、つぎのことを教えは決してしないだろう。別の個人がこれらの語を発することで彼に何事か意味をつたえようとしているとは。人が言語^{ラング}の中に備わっている [[無数の]] 辞項を使って何事か意味を伝えようとしていると私たちが思えるためには何が必要だろうか。これは単にラング概念だけとの対比でディスクールとは何かを知ろうというのと同じ問題であり、一見すると答えは簡単だ。ディスクールは、初歩的なやり方であろうと、私たちの知らないやり方であろうと、[あらかじめ] 言語形態を纏って現れる諸概念のうち二つのもの間に絆を断言することからなる。これに対して言語^{ラング}があらかじめする事といえば、思考の意味作用が生じるために互いに関係付けられることを待っている孤立した諸概念を実現することだけである。

註：校訂記号の凡例

[[]] 抹消

[] スタロバンスキー版での抹消

尚、原文には極めて詳細な校訂記号が付されているが、翻訳には再現できない (Cf. CFS 43, p. 93)。また下線強調はソシュールによる。

以上が問題のテキストの全文である。一読して全体を貫く奇妙なトーンに打たれる。ここには、ディスクールと言語^{ラング}の間に横たわる深淵の前で途方に暮れて佇んでいるソシュールがいる。自らの問いに確かに一つの答を与えてはいるが、ありきたりのものに過ぎない。「一見すると答は簡単だ」の「一見すると」という表現が、問題が答を見いださずに終わっていることを示唆している。このディスクールという謎に対するソシュールの無力

感は、しかし、単にそれだけではない濃密な何かを発散してもある。謎を問うテキストがそれ自体一つの謎になっている。

私たちは、次の二つの問いを通して、このテキストが放射する不透明な意味を追究しよう。

1. ソシュールのラングとラカンのララングはどう関連するか。
2. ララングと記号の恣意性はどう関連するか。

それぞれの問題意識は次の通りである。

1. ソシュールが言語^{ラング}を記号のシステムと定めたこと、ここに今世紀の言語学の誕生と一般記号学の構想が告げられたことは周知のことだ。このソシュール理論の中心的概念言語^{ラング}を分析し、ラカン独特の言語観を表すララング、定冠詞 la と名詞 langue を一綴りにしたラカンの造語だが、これと突き合わせる。

2. 記号の恣意性とは言うまでもなく、シニフィアン、記号の表現面と、シニフィエ、記号の内容面とは、なんの内的関連によっても結び付けられてはいない、ある語において、かくかくの音がしかじかの意味に対応していることには必然性はない、という、ソシュールが記号の第一原理とした考え方だった。記号の恣意性はラングと並ぶソシュール理論の中心的概念だが、これがラカンのララングとどう関連するかを、第一の問いの議論を受け検討する。

1. ラングとララング

ミシェル・アリヴェ Arrivé は『ことばと精神分析、言語学と無意識』(1994) で「ソシュールのラングは既にラカンのララングではないか」と

問うている (p. 128)。これを私たちの仮説に借用しよう。つまり本稿が証明を試みるのは「ソシュールのラングはラカンのララングである」という命題である。

そこで、当然二つの概念「ラング」と「ララング」の比較の作業を行うことになるが、これは同一性の判断に関わる。では何が判断の基準となるのか。ここではジャン＝クロード・ミルネール Milner が『言語への愛』で提示した五つの命題を援用する。ミルネールによれば、^{ラング}一言語が^{ラング}一言語たりうるためには次の諸命題を排除しなければならないと言う。

—^{ラング}諸言語は、[互いに] 共約不可能なので、一貫した一クラスを形成しない。

—^{ラング}一言語はそれ自身に同一ではない。

—^{ラング}一言語は実質である。

—^{ラング}一言語は階層化されることを停止しうる。

—^{ラング}一言語は同位体ではない。

(p. 20, [] は末永による補足)

すぐに見てとれるように、これらの命題は、それを満たせば^{ラング}言語が^{ラング}言語ではなくなってしまうような条件であり、逆に言えば、これらの条件を満たすものとは、言わば反言語であり、不可能性としての^{ラング}言語ともいえよう。ミルネールによれば、一なるものとしての^{ラング}言語が退けなければならないこの五つの命題は、ある^{ラング}言語の場所、ある^{レヴェル}現実界を描き出してやまないとも言う。そしてこれこそ、ラカンがララングの名で呼ぶものだと言うのだ (p. 21)。

したがって私たちの「ラング」と「ララング」の比較の作業はこの五つの条件を、私たちが読み取るソシュールの^{ラング}言語概念が満たすか否かの検証にはかならない。

そこで、問題のソシュールのテキストに戻ろう。ここに私たちが感じたある奇妙さの一つには次のことに由来するのではないか。それは、ここに提示された「孤立した諸概念」の集合というソシュールの言語観が極めて平板であることだ。ここにあるのは私たちが知るソシュールの^{ラング}言語概念のうちの限られた一面でしかない。このノートに付したコメントの中でスタロバンスキーは、このラングを「単なる概念の目録」(p. 15)と呼んでいる。つまり、この言語観はソシュールのラング概念のうちでも言語外現実から切り離された「記号の体系」としての^{ラング}言語に過ぎない。

しかし記号の体系がソシュールの^{ラング}言語概念の全てを覆うものではないことは周知の事だ。ここでは別の、そして同様に重要な側面を検討したい。つまり、差異の体系としてのラングである。そもそもソシュールの言語学から指向対象の問題が退けられたのは差異の原理によってだった。というのも記号の価値はそれが指す対象との対応によって決まるのではなく、同じ体系内の他の記号との差異によって決まるのだったからだ。

このソシュールの^{ラング}言語概念の二つの側面、記号の体系と差異の体系こそ、周知のように、ソシュールのエピステモロジーの両輪として今世紀の言語学の成立と記号学の発展に寄与したのだった。差異の原理により^{ラング}言語は言語外現実から解放され、現代的な意味での言語学の研究対象となったのであり、また^{ラング}言語を記号の体系と捉える視点が言語学以外の様々な社会科学に、記号をモデルにして対象を分析する方法論を提供したからだ。

しかしながら^{ラング}言語のこの二つの概念からある問題が生じもする。差異の

体系としての言語は記号の体系としての言語の存在を脅かす。どうい
う
とか？

問題は記号の体系としての言語の自己同一性に関わる。言い換えれば、
次のような問いとなる。言語は言語共同体の成員の誰にとっても同一だろ
うか。もし答が否定的ならコミュニケーションの道具というラングの定義
自体に反してしまうことになる。第三回講義（1910-1911）でのソシユ
ールによるラングの定義を確認しておく。

[ラングとは] 社会的コードであり、言語能力の行使に必要な道具を
なす。(245)⁽⁴⁾

「社会的コード」は、「コード」の定義から、誰にとっても同じものでなけ
ればならないだろう。すると社会的コードとしての言語は誰にとっても同
一のはずだということになる。ところがソシユールはこれを否定しかねない
発言をしてもいる。やはり第三回講義からふたつ引く。

…この [ラングという] 宝庫は、もし一人一人の個人をとるなら、
どの個人においても、完璧ということはけっしてないだろう。(240)

[ラングという] 社会的事実是一種の、割り出される平均値であり、
おそらく、いかなる個人においても完全なものとしては得られないだ
ろう。(220-221)

このようにソシユールによれば完全な言語はどこにもない。そして言語と

は平均値のようなものだというのだ。平均値とは個体間の偏差を前提にした概念である。すると、平均値としての言語^{ラング}とは人々の間での偏差を、一人ひとり人により異なる個人言語^{ラング}を前提にしているのだ。

こうして、一方にコードとしての言語^{ラング}、他方、人によって異なりうる個人言語^{ラング}があることになる。するとソシュールの言語^{ラング}概念は矛盾に陥っているのか。

これを考えるために、コミュニケーションの問題を接線に引いてみよう。言葉を交わす二人の主体を想定する。もし二人が互いの言葉を理解するにいたれば、このコミュニケーションの成立は両者が同じコードを、したがって同じ言語^{ラング}を共有していることの証明となるだろう。

しかし一つ問題がある。それは次のようなことだ。まず議論の前提として「コミュニケーション」という語を「二人の話者がある記号なり言表に対して同一の指向対象を共有すること」と定義しておこう。すると次の困難が生じるのだ。私たちはコミュニケーションの成否を判断する手段を初めから欠くことになるのである。というのも、ソシュールにおいては、周知のように、その言語学の主要な射程から指向対象の問題は排除されているからだ。これは差異の原理からの帰結だった。思い起こそう。ソシュールによれば言語^{ラング}は名称目録ではない。言語記号の価値はその記号によって指示される言語外の対象との一対一対応の関係によって定まるのではなく、同じ言語体系に共存する他の記号との差異によって確定されるのだった。こうして指向対象を、したがってコミュニケーションの成否の判断基準としての第三項を欠くことになる。すると、検証の手段は、「互いに理解した」という話者が抱く確信以外にはないことになる。これが私たちの議論の出発点だ。

シミュレーションを試みよう。話者Aが言葉を発する。話者Bがそれを聞き理解する。Bは言語のコードに基づきAのメッセージを解読したことになる。この時点でコミュニケーションは成立したことになるのか。いやまだBが本当にAの言いたいことを理解したか否かは判定されていない。BがAに言葉を返し、これを通じAが、自分の言葉に対するBの理解が正当であることを確認しなければならない。だがこの段階をクリアしても、さらに次の問題が生じる。最初のAのメッセージを理解したことを示すBの言を、Aが本当に理解したか否か、である。この判定のためにはAが新たなメッセージをBに送らなければならない。つまり無限循環に陥る。したがって同一コードの検証は無限に次の発話の機会に繰り延べられ、全員に同一な共同言語は永遠に決定不可能である。

ここでの真の問題は次のように表現できる。共通コードとしての言語の原理的な決定不可能性にも関わらず、自分の言語コードと他の人のそれとの間の偏差の可能性を殆どの人が通常意識しないのはどのようにしてか。話す主体一人ひとりの間で言語は異なるかもしれないにもかかわらず、最終的な破綻に陥ることなく人々の間で言語活動が続けられるのはどのようにしてか。答は次のようになる。この、同一言語の決定不可能性そのものによってである、と。

話者の言語意識は初めから共通の言語を想定している。相手も自分と同じ言語を話す前提しなければ話しかける事はないだろう。また、たとえコミュニケーション成立にいたらない場合でも、話者たちはそれを互いの言語の決定的な破綻とは認めないだろう。同一言語の確認が単に次の機会に延ばされるだけである。そのようにして、誰にも同一な言語へのこの根拠なき信憑は、その都度の対話の終わりに回復される。これが言語の果て

しない再生産を保証する。共同言語^{ラング}を最終的な破綻から免れさせるのは、同一のラングの決定不可能性そのものにほかならない。その一方で、個人言語^{ラング}は、「私の言語^{ラング}が他の人とは異なるかもしれない」という可能性は、話者に意識されることもなく、初めから言語意識の圏外に留まり続ける。

ソシュールの言語概念^{ラング}の二つの位相、記号の体系と差異の体系、前者に対応するのが自己同一なものとしての言語^{ラング}、共同言語^{ラング}である。しかし、見たように、差異の原理が、差異の原理による指向対象の不在が、これを決定不可能に陥れ、個人ラングの可能性を裏付ける。ところが、この決定不可能性こそがむしろ主体の共同ラングへの信憑を、したがって言語活動と言語^{ラング}そのものの再生産を、ある間接的なやり方で保証したのだった。これが私たちの分析がソシュールの内に読み取った逆説的なラング概念である。すると、この言語概念^{ラング}はまさしくミルネールがラングの条件として挙げた五つの命題を満たすのではないか。

振り返ろう。第一の条件は「諸言語^{ラング}は、[互いに] 共約不可能なので、一貫した一クラスを形成しない」だった。私たちは諸言語^{ラング}については検討しなかったが、言語^{ラング}そのものについて、同一の言語共同体の内部においてさえ共約不可能でありうること、つまり一人ひとりの間で異なる個人言語^{ラング}の可能性を示した。まして異なる固有言語の間で共約不可能なのは当然である。

したがって、第二の条件「言語^{ラング}はそれ自体に同一ではない」、第五の条件「言語^{ラング}は同位体ではない」も満たしたと言えよう。

では第三の条件「言語^{ラング}は実質である」に関してはどうか。この条件は次の命題が認められるなら満たされた事になるだろう。その命題とは「言語^{ラング}を成り立たせている実質とは言語^{ラング}そのものである」だ。これはまさしく私

たちの分析を通じて見たことにほかならない。言語は言語の決定不可能性の内に棲まっている。言語がその生命を汲み出してくるのは、記号の体系と差異の体系の間で、共同ラングと個人ラングのはざままで、繰り広げられる様々な動きの内からなのだ。

第四の条件が最後に残ったが、それは「言語は階層化されることを停止しうる」だった。もしここで言われている「言語の階層化」が対象言語とメタ言語のそのことなら、私たちは次のように言うことができる。私たちは自らに同一なラングを決定する事の不可能を示したが、このことは言語を指向対象として、したがって記述の対象として確定する事の困難と不可能を示唆している。これはメタ言語の問題化以外の何ものでもない。

以上、私たちが明らかにしたソシュールのラング概念は、ミルネールの言うララングの五つの条件をほぼ満たしていると言えよう。少なくとも、ソシュールのラングとラカンのララングが、大方の予想に反して、極めて近い概念であることは明らかになったと思う。

2. ララングと恣意性

さて、ソシュールのテキストに戻りラングと記号の恣意性の問題について考える。私たちの考察に関わる部分だけをもう一度引用しよう。

色々な概念がそこにある、言語の中に待機して（つまり言語形態を纏って）。例えば、牛、湖、空、[[強い]]、赤い、悲しい、五、割る、見る、というように。[...] これらの語がなしているこの一連続は、それが喚起する観念がどれほど豊かでも、ある個人に、つぎのことを

教えは決してしないだろう。別の個人がこれらの語を発することで彼に何事か意味を伝えようとしているとは。

「牛、湖、空…」の語の羅列は、ここでは言語^{ラング}の中の諸々の言語単位の布置の例という資格で提示されている。意味を発動することのない語の連続というわけだ。しかし、ここで興味深いのは、著者の意図に反して、これらの語がなしている連続がある意味を、ある奇妙な情感を醸し出していることである。ところで、一つの、あるいは複数の言語形態が一旦テキストの内に置かれるやそれは文脈を持たないわけにはいかない。するところした言語形態は単に概念だけでなく、ある意味を持たずにはいないのではないか。一般に、ある記号体系に属する複数の単位の一連続は、そこにおいて各单位が互いに差異化し、また参照し合う一文脈を構成しないわけにはいかない。つまり、それは意味を生成すること以外の何ものでもない。

ソシュールのテキストは明らかにその意図との間に齟齬を来している。これは次の事も意味していないか。ソシュールはある語り得ないものを語るろうとしたのだ、ということ。それは何か。言語^{ラング}そのものである。言語とはそもそも語り得ない対象ではないか。これは単に私たちの分析が明らかにした言語^{ラング}の決定不可能性が投げかける問題であるというだけでなく、ソシュールの仕事の全ては、言語思想史の全てがとまでは言わなくとも、この問題を提起しているのではないだろうか、その晩年の伝説的な沈黙にいたるまで。

すると、ソシュールが「色々な概念がそこにある、言語^{ラング}の中に待機して(つまり言語形態を纏って)。例えば、牛、湖、空、…」と記した時の「ラング」は、不可能なるラングとして、定冠詞 la とつながれ、「ララング」

と一綴りにされなければならなかったのではないだろうか、もしソシュールが、ありえないことだが、ラカンの造語ララングを知っていたならば。

ところで、数千ページとも言われるソシュールの原資料のうちに定冠詞 la とラングをつないで一語に綴られたララングの出現例が見いだされる。次のコピーをご覧ください。

La langue n'est créée que au vue du discours, mais
 peut-être ce qui sépare le discours de la langue, ou peut-être
 ce qui, à un certain moment, permet de dire que la
 la langue entre en action comme discours ?

(l'importance) Des concepts variés sont là, prêts dans la langue,
 (c'est-à-dire revêtus d'une forme) tels que Goethe,
luc, ciel, rouge, triste, cing, ferme, voir

(qui s'intègre) À quel moment, ou en vertu de quelle opération, de
 quel jeu ces concepts formeront-ils le discours ?
 de quelles conditions

ほかでもない私たちが読んでいる「ディスクールに関するノート」、しかもたった今問題にしたりである。上から5行目、Des concepts variés sont là, prêts dans la langue, … そう、ララングと綴られるべきではなかったかと問うたその「ラング」こそまさしくそう綴られていたのだ⁽⁵⁾。

もちろん、これは誰にでも起こり得る書き間違い lapsus に過ぎない。いや、フロイト的な抑圧されたものの回帰としての lapsus 「言い間違い」ですらない。これはソシュールによるラカンの造語の借用ではないからだ。1913年に没したソシュールがその60年後に登場したこのラカン用語を知

る機会は、時間的前後関係からして絶対にあり得ない。主体によってかつて一度も生きられたことのないものは、したがって抑圧の対象とはなり得ないのだ。ソシュールにおけるこの「ララング」の出現は純粋な偶然であり、たまたまの一致に過ぎない。

とはいえ、全ての可能性を否定できるわけではない。たとえば次のような可能性だ。ソシュールは、同一なる言語^{ララング}の決定不可能性や個人言語^{ララング}の可能性といった私たちの考察が明かした言語^{ララング}の一側面を自覚していた（これは充分あり得ることだ、私たちは100パーセント、ソシュールのテキスト、一般言語学原資料に基づいてあの議論を発展したのだから）。そしてソシュールはそれを「ララング」という造語によって名付け、この語を「ディスクールに関するノート」の中で使った、等々。

もちろん殆んどあり得ないことだ。「幻想 *fantasme*」と言われるだろう。しかし事実は永久に突き止められないだろう。相手にしているのが検証可能な類のことではなく、推測するしかないからだ。

したがってソシュール自身の意図を追究することは「作者の死」の二重の意味によって問題にならない。第一に著者の不在によりもはやその真意がどこにあったか彼自身に証言を求めることは出来ないこと、第二にはバルト (Barthes, 1968) の言う意味で、テキストの意味作用は著者の意図からは独立しているからだ。

ここで言える唯一のことは、ソシュールの手稿に「ララング」の出現例が確かめられたこと、それも、この語の意味がまさしく文脈と一致するような箇所に見出されたということ、これだけだ。これは事実である。別様にあり得たかもしれない、しかしこうなのだ。それ以上でもそれ以下でもない。これが事態の全てである。

だが、なんという事実だろうか。冒頭で確認したように、何度か公刊されながら、どの版もこの「綴り違い」を報告していない。最も厳密な校訂記号を付した『カイエ』の版でさえ「ママ」を付けていない。その都度、この記号（反記号？）「ララング」は、それを凝視したはずの読み手の視線を逃れていたのだった。それが定冠詞と一綴りにされたこと、そしてこの綴りの「異常」が校訂者たちの注意の網をくぐりぬけてきたことも、また「偶然」なのだろうか。だがそもそも偶然も必然も事実なるものの属性である。

こうも言えよう。問題のテキストはラングからディスクールへの断絶を前にしたソシュールの、ある意味で無力感の表白だった。だが、ある記号が複数の読者の、それも文献の研究者という「プロの読者」の目に不可視であったという事実、ここに既に、実現されたテキスト（ディスクール）とそれを読み取ろうとする読み手の言語との間のある深淵が現れているのではないか。これこそ、ソシュール理論の中軸をなすラングとパロールの対立が孕む、そして終生ソシュール自身解決がつかなかった問題、ラングとパロールの間は深淵により隔てられながら、その境界の確定は困難であるという問題の露呈の一つでもある（Cf. 第三回一般言語学講義本論第二部第一章末、およびエングラール校訂版、断章 2022）。

また、問題のテキストでのソシュール自身の問い方にならえば、どの瞬間に、あるいは、どのような操作によって、どのような作用によって、どのような条件によって、一つの記号はラングの記号からディスクールの記号へと生成するのだろうか、とりわけこのソシュールのテキストに出現した「ララング」という記号は。いや、もしそれが純然たる書き間違いであったなら、ソシュール個人のラングの中にはこの記号は存在していな

かったのだから、この問いは無意味になる。とはいえ、la langue が lalangue と書き間違えられる可能性こそ、そもそも言語^{ラング}の構造の、そしてまたラングとパロールの関係の本質的な一部をなしているのではないか。

すると、もはやソシュール自身の意図の問題を超えてもいる。そもそもこれは既に確認したことだった。ソシュールは問うている、「色々な概念がそこにある、言語^{ラング}の中に待機して。例えば、牛、湖、空、強い、赤い、悲しい、五、割る、見る、というように。これらの語がなしているこの一連続は、それが喚起する観念がどれほど豊かでも、ある個人に、つぎのことを教えは決してしないだろう。別の個人がこれらの語を発することで彼に何事か意味を伝えようとしているとは」と。私たちは次のように言うことが出来よう。ソシュールの手稿に現れたある文字の連続 lalangue はつぎのことを教えは決してしないだろう。ソシュールがこの語を綴ることで何事か意味を伝えようとしたかいは。

ただ、このソシュールの「ララング」についてこれだけは指摘できる。こうした私たちの議論を可能にしているある根本的な条件がやはり存在しているということだ。それはほかでもない、ある特定の文字の連続 l-a-l-a-n-g-u-e がある特定の意味を喚起するという事実そのものだ。これもまたもう一つの「こうである、だってこうだから」なのである。そしてこれこそ記号の恣意性の意味にほかならない。ミルネールが恣意性について語っている所から引こう。

かくかくの音がしかじかの意味を指し示す […] ことは、現在では純粋な出会いと考えられる。つまり、なぜこうであって別様にはないのか、恣意性は言う、答はないと。(p. 59)

記号の恣意性とはかくかくのシニフィアンとしかじかのシニフィエとの出会いのことだ。ラカンは「偶発事 contingency」と言った (1975, p. 41)。私たちは「偶然の一致 coincidence」と言おう。記号の恣意性とはあまりに偶発的なので人が気づきもしないような偶然の一致なのだ。そしてソシュールのテキストへの「ララング」の出現のように、偶然の一致が想像を絶するほどの極端な偶発性を伴って現前する時、それは現実界^{ル・レエル}の応答 (Cf. Miller) と呼ばれるだろう。ラカンがエスについて語った『テレヴィジョン』の一節から引用する。

エスとは何か、それは誰もそれに気付かない機知 mot d'esprit のことだ。(p. 72)

これこそ、記号の恣意性にあてはまることではないだろうか。あるいはむしろ、記号の恣意性があらゆる言語記号を規制する原理であるなら、記号の恣意性こそ、こう言ってよければ、「原初の誰も気付かない機知」なのだ。これがソシュールの発見の意味ではなかったろうか。ソシュールはまさしく言語^{ラング}の現実界^{ル・レエル}に触れたのである。

結 び

私たちの読解は、ソシュールの残したディスクールに関する走り書きが放っている、ある奇妙な情感に導かれてここまで辿り着いたように思われる。このテキストの不透明な磁力の源は何だったか。一つは、そこに表明

されている平板な言語像によって隠蔽されているもう一つの言語の影だったかもしれない。それはある不可能性としての言語であり、ラカンの用語「ララング」で呼ぶにふさわしいものだった。

次に私たちは、このテキストに「ララング」という記号そのものが埋め込まれていたことを発見した。数度にわたる公刊の機会にも、この記号「ララング」は手稿を凝視したはずの刊行者の眼差しをその都度逃れていたのだった。ここにも「誰にも気付かれない機知」があったのだ。

こここそ、このテキストの発する不透明な意味の磁力の源であるとしてもいうかのように、「ララング」という仮面の下に、ソシュールの言語概念の表の顔たる記号の体系が抑圧する不可能なるものとしての言語と、誰にも気付かれない機知としての記号の恣意性の真理（反真理？）とが、同時に隠蔽され、また露出してもいる一点であり、言語と記号の現実界が、まさしくこのテキストそのものの現実界とぴったり収斂する一点だったのだ。これが、私たちが読み取ったソシュールとラカンの一つの出会いである。

〔注〕

- (1) 本稿は1998年度日本フランス語フランス文学会秋季大会で筆者が発表した「ソシュールの言語、ラカンの言語」（於大阪大学、10月25日）の草稿に多少の加筆、改変を加えたものであり、またスリジー国際文化センターでのシンポジウム“Linguistique et psychanalyse”での筆者の発表“L'arbitraire du signe et le réel lacanien”（於スリジー・ラ・サル、フランス、1998年9月6日）とも内容に共通する部分があることをお断りしておく。
- (2) Michel Arrivéによる一連の仕事（1986、1994）がその代表的なものである。

- (3) 拙稿 1998, p. 35.
 (4) ソシュールからの引用は一部を除き『一般言語学講義エングラール校訂版』 [=CLG/E] の断章番号で出典を示す(「文献」参照の事)。
 (5) ソシュールの神話研究の手稿 Manuscrit français 3959 にもう一つの lalangue の出現例がある: Gandon, p. 88 参照。

文 献

- Arrivé, Michel, 1986, *Linguistique et psychanalyse*, Paris, Méridiens-Klincksieck
 —1994, *Langage et psychanalyse, linguistique et inconscient*, Paris, PUF.
 Barthes, Roland, 1968, “La mort de l’auteur” in *Manteia*, no 5: *Œuvres Complètes* tome 2, Paris, Seuil, 1994, pp. 491-495.
 Fehr, Johannes, 1995, “Boeuf, lac, ciel - concierge, chemise, lit” in M. Arrivé et C. Normand (Dir.), *Saussure Aujourd’hui - Colloque de Cerisy*, numéro spécial de *LINX*, pp. 431-438.
 Gandon, Francis, 1986, *Sémiotique et négativité*, Paris, Didier Erudition.
 Lacan, Jacques, 1974, *Télévision*, Paris, Seuil.
 —1975, *Le Séminaire livre XX: Encore 1972-1973*, Paris, Seuil.
 前田英樹, 1994, 『言語の闇を抜けて』, 書肆山田.
 丸山圭三郎, 1981, 『ソシュールの思想』, 岩波書店.
 Miller, Jacques-Alain, 1988, “Les réponses du réel” in *Aspects du malaise dans la civilisation*, Paris, Navarin.
 Milner, Jean-Claude, 1978, *L’amour de la langue*, Paris, Seuil.
 岡村民夫, 1997, 「ソシュールのアナグラム再考—詩とシーニュー—」, 『立教大学フランス文学』第26号, pp. 1-24.
 Saussure, Ferdinand de, 1916, *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bally et Albert Sechehaye avec la collaboration de Albert Riedlinger, Lausanne et Paris, Payot. [=CLG]
 —1967-1968, 1974, *Cours de linguistique générale: édition critique*, par Rudolf Engler, fascicule 1-3, fascicule 4, Wiesbaden, Harrassowitz. [=CLG/E]
 —1990, “Note de Ferdinand de Saussure concernant le ‘discours’”, publié par René Amacker dans *Cahiers Ferdinand de Saussure*, [=CFS] 43, pp. 93-94.

Starobinski, Jean, 1971, *Les mots sous les mots. Les anagrammes de Ferdinand de Saussure*, Paris, Gallimard.

末永朱胤, 1998, 「遂行的なものとしてのラングーソシュールの言語概念再考」 in 『フランス語フランス文学研究』 No. 73, pp. 34-44.